

月着陸から半世紀 民間飛行元年



2019年 宇宙の旅

人類が初めて月に立った米アポロ11号の月着陸から20日（日本時間21日）で50年を迎える。冷戦を背景に国家が覇権を争った宇宙開発競争から半世紀。主役は官から民に移り、複数の民間宇宙船が年内にも人を乗せた飛行を始めようとしている。拠点の一つでは、間近に迫った宇宙旅行の準備が急ピッチで進んでいた。

メキシコ国境に近い米南部の街エルパソから車で2時間。気温40度の荒野に突然、羽のような流線形の建物が現れた。世界で初めてつくられた宇宙港「スペースポートアメリカ」だ。

飛行機のような8人乗りの宇宙船「スペースシップ2」が、ロケットエンジンで高度100⁺まで飛び、無重力や漆黒の宇宙、丸い地球を体験できる。英実業家リチャード・ブランソン氏が率いる宇宙ベンチャー「ヴァージン・ギャラクティック」が募る往復2時間の旅費は25万ドル（約2700万円）。日本人約20人を含む50カ国以上の約700人が予約した。

成田の7倍

「ここで、まもなく史上初の宇宙旅行が始まります」。案内役のカーティス・ロズモンドさん(51)はうれしそうに話す。宇宙港は成田空港の7倍にあたる約73平方⁺。3・6⁺の滑走路と3階建てのターミナルビルを備え、4千平方⁺の格納庫では10人ほどの作業員が荷下ろしをしていた。

8月にも、別の開発拠点で内装工事中の宇宙船が100人以上の技術者らと移ってくるという。最終テストをして米連邦航空局（FAA）の認可が出れば、週3回の宇宙旅行が始まる。宇宙港は2011年、地元ニューメキシコ州が約2億⁺（約215億円）を投じて更地から整備した。雇用増や観光収入を狙いで、旅行が始まれば年20万人が見学に訪れると見込む。米国では現在、こんな宇宙港が12ある。ある調査会社は15年後、年3万人が宇宙旅行をすると予測した。

アマゾン創業者ジェフ・ベゾス氏が手がける「ブルーオリジン」も、年内に宇宙旅行を始める計画だ。全自動のロケットで一気に宇宙まで行き、乗客が乗るカプセルごとパラシュートで降りてくる。いわばロケットを使った巨大な逆バンジージャンプで往復約10分。

旅費は未定だが、近く搭乗券を発売するという。

短時間の旅だけでなく、国際宇宙ステーション（ISS）との行き来も米航空宇宙局（NASA）は民間に任せよう方針だ。電気自動車テスラのイーロン・マスク氏が立ち上げたスペースXと、米航空大手ボーイングがそれぞれ開発する宇宙船が年内に人を乗せた試験に挑む。日本の野口聡一飛行士や星出彰彦飛行士も乗る可能性がある。

NASAはISSでの旅行者の滞在も来年から認める方針。宇宙ホテルを民間が打ち上げる構想もある。

事故を免責

ただ、宇宙飛行は危険と隣り合わせだ。ヴァージンの宇宙船は14年、パイロットら2人が死傷する墜落事故を起こした。スペースXの宇宙船も今年4月の試験で爆発が起き、人を乗せた試験が延期されている。

それでも米国で民間の宇宙開発が進むのは、04年に商業宇宙打ち上げ法が改正され、旅行者が危険を理解してインフォームド・コンセント条項に同意すれば、事故が起きても打ち上げ事業者や製造会社が無責されるようになったからだ。宇宙ビジネスに詳しいセンチューリー法律事務所（北村尚弘弁護士）は「下請け業者まで免責する州法を整えるなど、宇宙旅行を誘致したい各州の競争になっている」と話す。（シエラ郡（米ニューメキシコ州）＝石倉徹也）



①世界初の宇宙港「スペースポートアメリカ」13日、米ニューメキシコ州
 ②ロケットエンジンで飛行する宇宙船「スペースシップ2」11ヴァージン・
 ギャラクティック提供
 ③宇宙港「スペースポートアメリカ」の管制室。モニター6台と電話、無線
 機くらいしかない